

- 【第1事件】2006年（ワ）第6484号謝罪及び損害賠償請求事件・原告王子雄外39名
【第2事件】2008年（ワ）第18382号謝罪及び損害賠償請求事件・原告吳及義外21名
【第3事件】2008年（ワ）第35183号謝罪及び損害賠償請求事件・原告劉国珍外44名
【第4事件】2009年（ワ）第35262号謝罪及び損害賠償請求事件・原告夏振東外80名

意 見 陳 述 書

2012年3月21日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国重慶市渝北区黃泥滂五人支路8号附3号6—2

重慶爆撃裁判原告 王 西 福 (Wang Xifu)

1 はじめに

私は重慶大爆撃被害者の王西福と申します。私は、1935年8月13日に上海市打鼓路(Da Gu Lu)で生まれました。現在、76歳で、重慶市渝北区黃泥滂五人支路(Huang Ni Bang Wu Ren Zhi Lu)に住んでいます。

1939年5月3日の日本軍の爆撃で父と母が殺され、私は孤児になりました。

2 重慶爆撃当時の私の家族

私の父は王海雲 (Wang Haiyun、1910年生まれ) と言い、原籍は重慶でした。母親は王朱氏 (Wang Zhushi、1915年生まれ) と言い、原籍は上海でした。

父は、13歳の時から重慶の民生公司という大きな船会社で通信員として働いていましたが、19歳から上海に行って小さな食物屋を開きました。その後、結婚してからは、夫婦で人も雇って飲食店を経営していました。

しかし、1937年8月13日に第二次上海事変が勃発したので、その直後、両親は日本軍の危害から逃れるため、私を連れて上海を出て重慶に向かいました。

私たち家族は、1937年9月に宜昌 (Yi Chang) に到着しました。そこから更に船に

乗って大体一週間かかる重慶の江北嘴 (Jiang Bei Zui) に着きました。

両親は早速重慶で家探しを始めました。苦労して江北区の以前から父方の叔父が住んでいる簡家台正街 (Jian Jia Tai Zheng Jie) に住む家を見つけることができ、私たち親子3人で住みました。

重慶の新しい家は、嘉陵江 (Jia Ling Jiang) から約70メートルの場所にあり、部屋としては客間、寝室、台所があり、屋根に小青瓦を敷いた木造の平屋で、面積は80平方メートル位の広さがありました。

両親は、重慶に家を見つけてから、約1ヶ月後には、自宅で麺類を中心とする飲食店を始め、その収入で一家は生活するようになりました。

店の麺の味が上海風で地元では珍しく味も良かったのでお客様の間で評判となり、店は繁盛するようになりました。

開店して1年後には、両親の店は一層繁盛し、炒め物を中心とする料理店に発展し生活は少し楽になりましたので、家族は幸せでした。

3 重慶爆撃による家族の被害

1939年5月3日の午後1時頃、空襲警報の音が鳴り響き、日本軍機が飛んで来たことに気付きました。その時、私と両親は店にいましたが、店のお客達は次から次へと避難しました。

私の家族も以前から爆撃の際に避難していた嘉陵江の川辺の木材置き場に逃げ込みました。両親と私の3人は積み上げられた木材の下の空間に体を隠していました。

間もなく日本軍機は私達がいた周囲に何発も爆弾を落としてきました。その中の1発が私達の避難していた木材置き場のすぐそばに落ちてきたため木材がガラガラと音を立てて倒れてきました。

私は、倒れてきた木材のため、額の右側を打ち肉が裂けて骨が見えるほどの大怪我をし、右足首も負傷しましたが、4歳でまだ体が小さかったので胴体は木材の隙

間に入り潰されませんでした。しかし、すぐ側にいた父と母は、運悪く木材の下敷きになり、内臓が破裂して死亡しました。

母は当時妊娠していましたが、お腹が圧迫されてあと2ヶ月で生まれる予定だった胎児も亡くなりました。

爆撃機が飛び去って間もなく、木材が倒れたことを知った木材工場の労働者が心配して木材置場にやって来て、「下に人がいるか」と叫んでくれました。労働者は私の泣き声に気が付き、約30分かけて木材を取り除いてくれ、ようやく木材の下から私を引っ張り出してくれました。

両親の死体は、近所の李金平(Li Jinping)さんたちが、木材置場から約300メートル離れた江北区簡家台五江支路のそばの觀山坂 (Guan Shan Po)に埋葬してくれました。

こうして私は、両親を失って孤児となり、住む家もなくなり、帰る所もない状態になってしまいました。

隣近所の人々は次から次へと家を離れて他の所へ避難したため、他に何人の死傷者が出たのか分かりませんでした。

私の額の傷は骨が見えるほど酷く、痛みも激しいものでしたが、近所の人が傷に薬草を塗ってくれ、約1か月で傷口が塞がりました。しかし、打撲の際の衝撃で骨が変形し、皮膚にも傷痕が一生残りました。大人になってからも時々発作的に頭に針が刺さったような頭痛が起きました。

翌日5月4日も、日本軍の爆撃がありましたが、叔父たちに連れられて山の方に逃げて無事でした。

地元の保長の何志成(He Zhicheng)さんと副保長の李志發(Li Zhifa)さんが私が孤児になったことを知って、「王西福は父親も母親も死んでいない、まだ子供なのに扶養者がいなくなった。これからは叔父の王海清が引き取って育てるべきだ」と言いました。

叔父の王海清は近所に住んでいた人なので顔は知っていました。1週間後、日本

軍機の爆撃を避けるために田舎に行っていた叔父の王海清が戻って来て、孤児になつた私を育てると言つてくれ、私を引き取つてくれました。

しかし、これから述べるよう私にとって孤児になつたということは、一切の希望の芽を絶たれることを意味していました。特に成人になるまでの毎日は悲惨の連続でしたし、その間に教育を受ける機会も全くなく、孤児になつたために私はその後長い間社会の最下層で生きることを強いられてきました。

4 叔父の家での差別され、いじめられた日々

叔父の王海清(Wang Haiqing)の家も簡家台にありました。王海清は衣服を作る職人で、仕立屋の店を出して営んでいました。叔父の家族は、祖母、妻、娘の王西蘭(Wang Xilan)のほかに、雇用人が一人いました。

叔父の家の暮らしぶりは普通でしたが、叔父は私をひどく差別して扱い、例えば自分の家族にはご飯を食べさせているのに私には水のような薄いお粥しかくれませんでした。

そのため私は腹がいつも空いていて、また冬には十分に防寒できる服も与えられませんでした。

叔父は私が8歳頃から家事を手伝わせるようになりました。家の掃除やご飯を炊くことのほか、生活用水を運ぶことや、薪や石炭を拾うことも、すべて私の日課でした。

毎日拾う薪や石炭は叔父の一家が使うのに足りるだけの分量を集めなければなりませんでした。水汲みは、叔父の家から300メートル離れた嘉陵江から一日8回水を運ばなければなりませんでした。私は毎日そんなに多くの事をしても、よく叔父に殴られていました。

また当時の叔父の店で使っていたアイロンは炭を入れて使用する代物でしたが、1時間毎に新しい炭を入れないと使えないで、その炭の入れ替えも私の仕事でした。

た。私がちょっとでも居眠りして炭の入れ替えが遅れると、叔父はいつも私をひどく殴っていました。

こんなきつい毎日を10歳まで続けましたが、叔父の虐待にこれ以上耐えられないと思うようになりました。丁度そのころ日本と中国の戦争も日本が降伏して終わつたので、それをきっかけに重慶の中心街に行って一人で働くと決心し叔父の家を出ました。

私は、最初、重慶の最も賑やかな繁華街の周辺で靴磨きを始めましたが、他の前から靴磨きをやっている人達にいつも小突かれるなどいじめられ、靴磨きだけでは充分に稼ぐことができませんでした。それで、靴磨きの他に、年寄りの車夫がやっている人力車を押して手伝う仕事をよくやりました。車夫は人にも依りますが少額ながら自分が得た運賃の一部を私にも分けてくれました。

そういう生活をしていた頃の私は、いつも靴磨き用具が入った箱と拾った吸い殻を入れる布袋とガマの葉で編んだ団扇（うちわ）の3つを持っていました。

その団扇は夜の飲食店でお客様から食べ残しをもらうために食事中のお客様を扇いであげるときに使う道具でした。毎日食べられることは最も大事なことでしたから、この団扇はいつも持っていてよく使っていました。朝飯の方は前日の夜の残飯を暖めて激安で売っているものを買っていました。皇后レストラン（今の会仙樓レストラン）では、そんな残飯をお椀一杯5分で売っていました。

当時の私の服は、ボロボロになったシャツ1枚と半ズボンだけでした。暖かい日の夜は、国泰映画館（今の東方紅映画館）か新川映画館の入り口で寝ていました。寒い日には、少しでも暖かい所を求めて、町中のゴミ箱に身を潜めて夜を明かしました。それ以外の殆どの夜、私は皇后レストランのかまどの下の穴にしゃがんで休んでいました。

こんな毎日を過ごしていたため、私は服はボロボロで体も汚く、しかも人が直ぐ気が付いて避けるほど悪臭がして、今思い出しても本当に最悪でした。

私はこのような生活を1949年末に重慶が毛沢東政権によって解放されるまで続け

ました。

5 新中國成立後の四川・チベット間の道路建設の仕事

1949年末に私は叔父の家に一旦帰りましたが、叔父は「お前、今14、5歳だから、私もお前を二度と殴らない。だけど、お前も仕事を探して自立しろ、この家にお前の居場所はもうないよ」と言いました。

仕方なくて私は地元の役人に自分の生活状況を伝えました。その役人は私が日本軍の爆撃で両親を殺され孤児になって苦労してきたことを知って、私に長安工場の採用試験を受けさせてくれました。その時、500人もの人が試験を受けました。しかし私は教育を受けたことがなく、字が読めないので、試験は不合格でした。試験監督の先生は、私のことを知って同情し、もし「1」から「100」までの数字を書けば旋盤工として採用すると言ってくれましたが、私は「1」さえ書けなかつたので、結局、この仕事に就くことはできませんでした。

その後、他の役人の人が私に「石工の仕事をやらないか。文字なんか要らないよ」と勧めてくれました。

そこで、近所の譚權盛(Tan Quansheng)さんを紹介されて、石工職人の周紹清(Zhou Shaoqing)さんの下で石工を学ぶ事になりました。私は南岸区の弹子石千担巷(Dan Zi Shi Qian Dan Xiang)で、周紹清さんに石工の仕事を教えてもらいながら、食糧倉庫を建造する仕事に携わりました。しかし、石工の仕事は想像以上に大変で、仕事の期間中、私の手は石を始終打つために腫れあがり、箸もしっかりと握れないほどでした。8ヶ月後、まだまだ未熟でしたが、私はやっと一人前のお金を稼げる石工になりました。

それからは石工の仕事をやるようになりました。仕事はとても辛いものでしたが、それでも一人で稼いで衣食を確保することができました。こうして私は3年間余り石工として重慶で働きました。

1953年12月に中国中央交通部が四川・チベット間を結ぶ川蔵公路を建設するためチベットに行く労働者を募集していました。そこで私はこれに応募し、チベット自治区の昌都(Chang Du チャムド)に行って、道路建設の仕事に従事しました。

こうして1953年末から1973年まで、20年間、私はずっとチベットで道路建設の仕事をしてきました。

最初は、昌都からラサまで道路を通し、それからその道路の整備にずっと携わってきました。この間、私は、昌都地区の魯朗、丁青県、林芝県やラサなどの20前後の地域で仕事をしました。

チベットでの道路建設の仕事では、私は誰よりもまじめに働きましたので、毎年先進工作者に選ばれました。その実績が認められて、1954年に私は中国共産主義青年団に入団し、それ以降も毎年優秀団員に選ばれてきました。

6 重慶に戻ってからの仕事と定年後の生活

1973年3月、私は37歳の時に重慶に戻り、重慶で仕事を探しました。その結果、重慶市労働局に所属することができ、解放碑不動産管理所に配属されました。そこでは修理工の仕事をしていましたが、約18年間務めて1990年12月に定年で退職しました。私は、現在、年金と養老保険金で一人で生活していますが、3人の娘も親孝行で、よく訪ねてくれますし、暮らしは安定しております本当に幸せです。

長女は解放碑不動産管理局旧城改造所で経理の仕事をしており、次女は自営業で朝天門(Chao Tian Men)で服装の商売をし、三女は渝北区の陶然居(Tao Ran Ju)で仕事をしています。

7 重慶大爆撃で孤児になった私の思い

私たちが提訴して今審理されている重慶大爆撃訴訟は、無差別爆撃という国際法に違反する戦争犯罪を裁く歴史的な裁判です。第二次世界大戦では日本だけでなく、

ドイツも、またイギリス・アメリカも、無差別爆撃を大規模に行い、非戦闘員である一般市民を大量に殺害しました。私たち重慶大爆撃の被害者は東京大空襲の被害者と連帶して闘っています。東京空襲では一晩で10万人が空爆で殺されたことを知っています。

中国の空爆被害は、実は重慶や四川省だけではありません。実際には、1937年の日中全面戦争が始まって以降、中国のほとんど全ての都市は空襲を受けています。そして各都市では多数の市民が爆撃で殺されています。

従って、重慶大爆撃は、このような全中国に対して日本軍が行った無差別爆撃を代表するものとして裁かれているとも言えます。

それだけに重慶大爆撃の裁判は中国人はこの裁判に強い関心を持っているのです。

重慶大爆撃裁判が提訴されて以降、重慶市及び四川省では、重慶、成都、楽山、自貢、松潘など各地で、無差別爆撃の事実を明らかにし、正義を実現するため、日本政府に謝罪と賠償を求める活動を展開しています。

特に、今年の5月3日、4日の「5・3、5・4」の記念日には、日本軍の爆撃被害者が連合し、重慶市に四川省各地の爆撃被害者も集い、「重慶宣言」を発する予定で、現在、その準備を進めています。

その「重慶宣言」は、国際社会に全世界に向けて発せられるものであり、世界中から無差別爆撃を根絶するための運動をもっと広く拡大しようとするものです。

今年は、1972年の日中国交回復から40周年です。同年9月の日中共同声明では「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」ことを日中両国政府が合意しています。この共同声明の精神に従うならば、日本政府は、重慶大爆撃が中国の普通の一般市民の命や体を傷つけ、家財を破壊し、生き残った人にも一生消せない傷を負わせていることを充分知るべきです。

現に私の場合、日本軍の爆撃で私の両親は殺され、私は孤児となり、幸せな家庭

を壊されました。もともと人間社会は厳しいものですが、守ってくれる大人のいない孤児にとっては特に厳しいのが現実です。

私は体験したことなので断言して言いますが、孤児になるということは実は人間としての全ての希望を奪われたことと同じことなのです。

私は叔父に引き取られましたが、差別といじめで辛い毎日を送り、10歳の時に事実上叔父の家を追い出され、その後は毎日残飯で命をつなぎ、路上で暮らす過酷な生活を強いられました。文字を学ぶ機会も奪われました。

私が味わったこのような苦しさを生み出した原因は、全て日本軍の重慶大爆撃にあります。残酷な無差別爆撃が父と母の命を奪ったためです。

私は、絶対に重慶大爆撃を行った日本軍を許すことができません。私は日本政府に私と全ての重慶大爆撃被害者に謝罪し、賠償するように強く求めます。

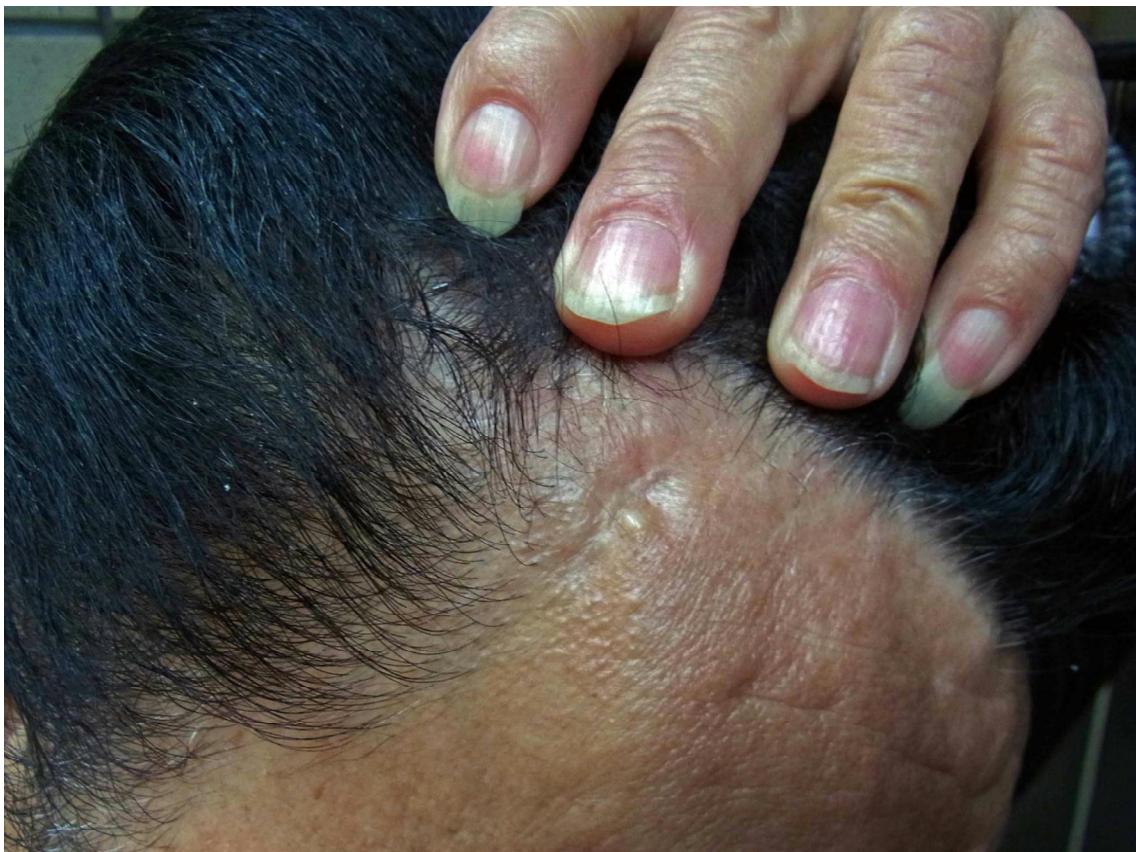
同時に、日本の政治家がアジアと世界の平和を実現するために真剣に努力し、そのための中日両国の本当の友好関係を実現するために行動することを望みます。

どうか裁判官の皆さんのが私の気持ちを理解し、私のささやかな希望を認められるように心から望みます。

以上



1939年5月3日、日本軍の爆撃によって原告王西福が額右側に大怪我をした後の傷痕（2012年3月撮影）



同上



王朱氏（母）

原告王西福（生後 6 ヶ月頃）

王海雲（父）

上海にて



王小燕（三女） 王群英（長女） 彭德宣 王西福 王紅（次女）
2010年 重慶趙母山にて



彭博（孫、長女の子） 王西福
2010年 重慶趙母山にて



重慶市街圖

